

「ソラピートの夢」

高杉晋太郎
たかすぎしんたろう

新川あらかわの浜に打ち寄せる波は真っ赤に染まっていた。あたりには血の匂いが満ちている。石垣村の按司あじ、長田大主ながたうふしゅは周囲を見回した。琉球では豪族のことを按司と呼ぶ。浜辺には多くの死体が転がっている。すべて敵兵だった。味方の負傷兵と戦死者は丁重に収用されている。勝敗はすでに決していた。首里の王府軍三千名とそれを先導した宮古島の島主、仲宗根豊見親なかそねとみやの軍百五十名が、石垣島の南部二箇所に上陸作戦を敢行し、いつとき、石垣島を統一し、琉球王府への反逆を企てた大浜村の按司、大屋久赤蜂おやけあかはちの軍を打ち破ったのである。石垣軍は、王府軍の上陸を阻止できなかった。松明を載せた筏で陽動され、新川と登野城とりのしろの二箇所に襲いかかった征討軍の両面作戦に、兵力に劣るアカハチは対応しきれなかった。新川に上陸した王府と宮古島の軍は東進し、登野城から上陸した王府軍と合流し、アカハチの居城フルストバルを

困んだ。衆寡敵せず、砦を棄て敗走したアカハチを王府軍が追っていた。

沖縄本島の南西三百キロから四百二十キロにある島々は先島諸島さきしまと呼ばれている。先島は宮古島を主島とする宮古列島と、石垣島を主島とする八重山列島で構成されている。

当時、沖縄本島は琉球と呼ばれていた。琉

球では六十八年前に戦国の世が終わっている。

北山ほくざん、中山ちゅうざん、南山なんざんという三つの王国が互いに

覇を競いあった「三山時代さんざん」に終止符を打ち、

琉球全土を統一したのは中山王尚巴志しょうはしだった。

尚巴志の統一王朝は七代まで続き、その王統を第一尚氏王朝と呼ぶ。その後、本部半島もとぶの

沖に浮かぶ伊是名島いぜな出身の農民、金丸かねまるが、王

府中枢で異数の出頭を遂げ、ついにはクーデ

ターにより第一尚氏王朝を滅ぼし、新王朝を

立ち上げた。金丸改め、王名を尚円しょうえんとしたた

め、この王朝を第二尚氏王朝と呼ぶ。

第二尚氏王朝樹立から三十一年が経過して

いた。王朝は三代目の尚真王しょうしんの世となり、琉球全土の治世は安定期を迎えている。しかし、首里の王府はまだ先島をその版図に取りこんではいない。

時は弘治一三年（西暦一五〇〇年）。この国の人々がヤマトと呼ぶ日本で織田信長が桶狭間の戦いに勝利する六十年前のことである。

敵兵の遺体をぞんざいに投げ捨て、一箇所に集める作業を見る長田の表情は暗かった。

「長田、アカハチの逃げ場所はどこだ？　ここはおまえの島だ。土地勘はあろう」

四十五歳の長田とは親子ほどにも離れていそうな若い男が、権高な口をきいた。

「おそらくは於おも茂と登だけ岳けに隠れているのではないかと思われます」

長田の口のききかたは上位者に対するそれだった。

「おまえの失策はずいぶん高いものについて」男は侮蔑の視線を石垣村の按司に向け、

嫌みを言った。

「そもそも、古乙姥くいつばが父上の言いつけどおり、アカハチに毒をもっていれば、このような戦役に我らが身を労する必要はなかったのだ」

クイツバとは、長田の異母妹だ。

「役にたたん女だったな」吐き捨てるように妹をけなす男に長田は、反論はおろか擁護の一句すら口にできない。

「金盛かなもり、その程度にしておけ」

二人の前に立つ、きらびやかな軍装に身を包んだ男が振り返らずに男の悪口を制した。

「しかし、父上」金盛と呼ばれた男は、不服そうな顔でさらに言い募ろうとしたが、男が振り向き、低いがよく通る声で「金盛」、と言うと口を閉ざして面を地面に向けた。息子の言動を封じた男には、人をしてその意に従わせるだけの威があった。嫡子である仲屋金盛は不服そのような顔色を見られぬために顔を伏せたのかもしれない。怒らせている肩が感情をあらわしていた。

「仲宗根豊見親様、たった今、底原そこばるにてアカハチめを討ち取ったとの報告が入りました」

宮古島の兵が走りより報告を入れた。仲宗根豊見親、童名わらびなは空広そらびー、幼い頃から神童と崇められ、戦乱に明け暮れていた宮古島を統一した英雄、目黒盛豊見親めぐるむいとうゆみやを先祖に持つ貴種だった。二十六年前から宮古島の頭職として島を統治している。「仲宗根」が家名で「豊見親」が称号となる。宮古島における尊称で「名高い領主」というほどの意味だ。名乗りは「玄雅げんが」という。

「そうか」喜ばしい知らせではあったが、それを聞いた仲宗根の口数は少なかった。

「どこだ？　それは」金盛が兵に訊ねた。「於茂登岳の麓でございます」兵は先ほどの長田の言葉を裏付けた。

「ご苦労だった」仲宗根の短い言葉とはうらはらに長田が兵に噛み付くような鋭い声をかけた。「アカハチの妻はどうなった！」

「王府軍が捉え、アカハチの所在を探るため、

拷問にかけたところ絶命したとのことでございます」

長田の顔が蒼白になった。喉の奥で妹の名が呑みこまれた。クイツバは兄と仲宗根の姦計の道具となることを拒み、政略結婚の相手であつたアカハチに殉じたのだ。

「ふん！ 父上に泣いて助命嘆願すれば、命ばかりは永らえたかもしれぬものを。強情な女だ」

仲宗根の嫡子である金盛は波照間島出身で父と親戚関係にある長田や、その妹のクイツバとその姉、真乙姥まいつばに対して主筋としての権高さで接していた。また、今回の反乱の首魁、波照間出身のアカハチが長田の幼友達であり、二人の間に友誼ゆうぎが結ばれていたことなど、斟酌しんしゃくに値しないと断じているようだった。

「金盛」仲宗根が息子に声をかけた。「はい」「石垣はこれで平らかになる。西表の慶来けらい慶田けだ城用猪ぐすくようちよはもとより王府に忠誠を誓う者。今後、先島はひとつとなり、首里の王府

に帰順することになるう」

「慶賀の至りでございます」

仲宗根の言葉を聞きながら長田は、その顔を見つめた。クイツバをアカハチに嫁がせ、石垣独立の野望に燃える幼馴染を毒殺する計画を実行しようとしたのは仲宗根に命じられたからだった。だが、クイツバの夫への愛をよみ誤った。いや、仲宗根の言に異をはさむことなど思いもよらぬことゆえ、妹も同じように宮古島の支配者であり、親族の長である男の命に従うと疑いもしなかつたのだ。

長田の視線を知ってか知らずか、仲宗根は犀利な眼を金盛の面に注いでいる。しかし、その視線の先にあるのは息子の顔ではない。ことに長田は気付いている。苦勞知らずの御曹司は人の心の機微を察するに疎く、己のことのみを考える男だったから、なぜ西表の按司の名が父の口から出たのか、なぜ波照間のよな八重山の南端の島にまで手を伸ばし、自分やクイツバを親族の端に連ならせ、石垣に

呼び寄せたのか、その真意を見抜くこととはできないただろう。長田の観察を裏付けるかのようには仲宗根は金盛に語りかけた。

「だが、まだ八重山はひとつになつておらぬ。

我が宮古にも王府にも属さぬ島がある」

宮古に属さぬと言わず、宮古にも王府にも属さぬという言葉が仲宗根の微妙な立ち位置を伝えている。

支配を受けぬ属島がどこであるのか、長田には分かるが、金盛にはわからない。金盛の顔に浮かんだ曖昧な表情がこの男の才質を雄弁に物語っていた。愚息の不明を見ても仲宗根の表情に変化はなかった。金盛に注いでいた視線の矛先をはずし、長田の顔に鋭い一瞥を送った。長田はそれを「答えてみる」
う催促とうけとった。

「与那国島でございますか」

控え目な声は一人ごとのようにも聞こえたが、仲宗根は再び金盛に視線を戻して言った。

「宮古の手勢を連れて行け。与那国を制する

のだ」

「王府の許可は？」長田は思わず聞いてしまった。すぐに非礼に気づき、首をすくめたが仲宗根はとがめだてしなかった。話し相手が欲しかったのかもしれない。少なくとも嫡子以上の知性の持ち主との。長田は宮古島の島主、いや、先島の島主になりつつある男の孤独をかいま見たような気がした。それは恐ろしく深い、底なしの深淵であるように思えた。

「得ていない」

「我が宮古勢で攻め入るのでございますね」金盛が勢いこんで叫んだ。その音量に長田は顔をしかめそうになった。声量の制御ができない者は馬鹿だと長田は思っている。

「攻めるとは限らぬ」

わざと低く声を落として、言葉の継ぎ穂を断ち切り、息子の甲高い声を抑える仲宗根だった。

「与那国島が宮古島に帰属の意思を表明すれば、無用な血は流れまい」

「アカハチは王府へ叛旗を翻したとき、与那国島へ共闘を申し入れたと聞き及びます」

長田の指摘に仲宗根も応じた。

「だが、与那国島はアカハチと手を結ばなかつた」

それをもつて与那国島が仲宗根や王府に誼よしみを通じたがっていると判断するのは早計にすぎた。孤島同士が同盟したところで連携した軍事作戦を実施することは不可能だ。各個に侵攻を受け、この石垣島のような憂き目にあうのは必定だった。それがわかつていての連携の拒否だったのだろう。つまり、与那国島はアカハチよりもものが見えていたというところかもしれない。

「今が潮時ということですか」上国を促すにせよ、武力に訴えるにせよ、石垣島を屈服させた今が交渉に最適の時期だと仲宗根は考えたのだろう。王府軍三千が石垣島に駐留している。その武力を背景に迫れば与那国島も膝を屈せざるをえないだろうとの狙いが伺えた。

長田の言葉に小さく頷き、仲宗根は与那国島の現況を訊ねた。

「与那国の首長は女だと聞く」「謎にまつまれています。おそらくそうであろうというこ

としかわかつておりません」

「まるで伝説の島だな」

「先島の西の端に浮かぶ島です。流求台湾の方が

石垣島石垣島よりも近いです」

与那国島から台湾は百十キロ、石垣島までは百五十キロある。首里との距離は約五百十

キロにもなる。

「一昔前は『血祭り』をしなければならぬほどの食糧難の島だったそうです」長田は仲宗根に与那国島史を語った。

『血祭り』とは食糧難から実施された間引き政策のことだ。『久部良割くぶらぼり』や『人升田とんぐた』と

いう儀式が行われていた。妊婦に岩の割れ目を飛び越えさせ、転落死させるか流産をさせ

るのが『久部良割』。『人升田』は男たちに
対して鐘の音によって緊急招集を実施し、間

に合わなかった者を斬り殺すというものだった。いずれも口減らしのために行われていた。

「『血祭り』を実施していた部落の長たちをまさに血祭りにあげたのが今の首長だという」

「農地の開墾を率先して進め、農作物を宮古島に売りに出すほどの成果をあげたのも今の首長です」

「当方の求めに応じて首里王府への貢租を差し出すというのであれば、争う必要はあるまい」

旨い言い方だなと長田は思う。実際は宮古島へ帰順させ、他の島々からの貢租と合わせて宮古島から首里に貢租を差し出すつもりなのではあるまいか。仲宗根は、宮古島を拠点として先島諸島への支配権を確立させようとしているのだ。その後ろ盾として首里の王府を利用する。王府と先島諸島の両者にそれぞれ別々の顔を見せている仲宗根は、王府の重職と、島々への支配権の両方を手に入れよう

としているのだろうか。

「島人は華を知らぬから夷えびすのまままで、服することを拒むのだ」仲宗根の呟きの意味を長田は理解できなかつた。

訝いぶかしげな長田の表情に気づいた仲宗根が言葉を継いだ。

「私は首里を見てきた」

二十三年前、仲宗根は第二尚氏王朝を建国した一代の梟雄きょうゆう、尚円金丸のもとを訪れ、朝貢を申し出たのだ。その見返りとして尚円から宮古頭職を任じられた。仲宗根豊見親十八歳じゅうはちざいのときのことだ。そして仲宗根は首里城を見た。長虹堤ちやうこうていを渡った。首里の街を、港を、久米の居留地を見た。巨大な外洋船が並び、人馬がゆきかい、宿泊施設や飲食店、寺院が広壮と立ち並ぶ石畳の道で呆然と立ち尽くしたことを今でもまざまざと思い出す。聞けば、朝鮮や明国の都はさらに巨大な都城だという。あ
あのとき、仲宗根は先島の秩序は首里の王府

によって保証され、確立されねばならないと
思った。首里が華ならば、先島の島々は夷な
のだ。夷は華と朝貢関係を結ぶことによって、
その文明圏に参画できる。自分は首里の名代
として先島に秩序をもたらすのだ。
「それほどに煌びやかなのでございますか首
里の街は？ 首里城は」
「見ることによってしか理解できないものが
この世にはあるのだ」

三山時代から琉球は、中国大陸の明から
冊封さつぽうを受けていた。冊封とは中華帝国「明」
と近隣の諸国家が結ぶ名目的な君臣関係で明
が宗主国、冊封を受ける国が朝貢国となる。
形の上では主従だが実質的には外交関係の一
種と言っている。明が冊封国に政治的、軍事
的に関与することはまれだった。ただし唯一、
明暦の使用は強要した。爾来、琉球の時は明
歴で刻まれている。それを自主独立の気概を
放棄したとそし誇る島人も多かった。仲宗根はそ
うした人々を抑え、琉球王府と明帝国との関

係を宮古島と琉球王府との関係に置き換えて王府への帰属を決めたのだ。

宮古島の主は、そのときの自分への風当たりの強さを思い出していた。表情を厳しくし、長田から眼を離して金盛に向かって言った。

「金盛、与那国島に向かい、島の首長に宮古島への忠誠を誓わせるのだ」

「もし、誓わぬとあれば？」まるでそれを望んでいるかのように金盛の声は上ずっていた。

「武力で従わせるしかあるまい。だが、いいか、まずは話し合え。流血事はできるだけ避けるのだ」

「かしこまりました」深々と頭を下げた金盛の表情を伺うことはできなかつた。

「私が王府に帰属して二十六年がたつ。あのときの私の判断は間違っていないなかつた。八重山も後に続くべきなのだ」

仲宗根はひとりごとと、長田に向かって訊ねた。

「与那国島の首長の名はなんといったか？」

「イソバです」

「イソバ？」

「ガジュマルのサンアイ・イソバと言われています」

「サンアイは村の名とも聞くが」仲屋金盛が背後に控える頭役に声をかけた。宮古島北端に近い平良ひらら出身の兵だった。与那国島に向かう軍船の上だ。軍船は七十名の宮古島兵を乗せて波浪に翻弄されながらも一路、断崖絶壁に囲まれた浮沈艦のような島に向かっている。

南風が北風に変わった。

「秋の新み北に風しよりも強いな」「那覇から明に向かう進貢船は、新北風を利用するといいますが、こいつはおそらくそれ以上です。予定よりも早く与那国につきそうです」

気温が急激に下がりつつあった。東シナ海上、台湾付近で発生した低気圧が急激に発達したようだ。「にんがちかじま二月風廻り」の季節に入っていた。それは旧暦二月頃に吹く強い風の名である。

「与那国は東西に細長い島です。サンアイ村は島中央部、やや北寄りにあります」

「島の地理に通じているのか」

「いえ、平良の狩俣村^{かりまたむら}出身の小僧が宮古島と与那国島の間を往き来する商人を通して島の情報を仲宗根豊見親に伝えているそうです。私は豊見親からそれを耳打ちされただけです」

金盛は慥然とした。父がその秘事を自分ではなく、この頭役に伝えたということが不満だったからだ。金盛は父が自分に隔意^{かくい}を持つていることを薄々感じ取っていた。

「それは便利な話だ。土地不案内では何かと不都合だからな。その小僧の名は？」

皮肉めいた口調で頭役に尋ねる。その口調の刺々しさに頭役は首をすくめながら答えた。

「鬼虎^{うんとら}といいます」

水平線の彼方、分厚い雲間に突然顔を出した夕陽の鈍い茜色をうけて、雲が湧き立っているのが眼にとまった。

「あの雲の下が与那国でございましょう」

眼を細めて島影を探すが、まだ鉛色の海と空の境目も定かならず、はっきりとは見えなかった。日が沈み、空が雲に覆われてしまつては月や星で現在地を確認することもできない。航走が危険となる。島陰に入り、風浪を防ぎたかった。金盛の思いが通じたのか、夜のしじまが降りきる前に船は与那国島東岸に着き、その地、カラグンに投錨とうびょうした。

「明け方までここで待とう」 「かしこまりました」頭役は金盛の顔を窺った。そこには戦意に猛る獰猛な表情が浮かんでいた。

「なんだ？」 「いえ、なんでもございません」

仲宗根から金盛のおもりを命じられた頭役は、金盛が父親から武力によらず、交渉によって目的を達することを優先するように言いつかっていることまでは知らなかった。

「鬼虎とは連絡がとれているのか」

「浜に隠れていると思います」

カラグンで上陸した金盛を待っていたのは背の高い若者だった。子供と青年の間の微妙な年齢であるように思われた。「鬼虎か」金盛が聞いた。眼線の先には若者の分厚い胸板があった。顔にはまだ幼さが残っているが体つきはすでに立派な成人のそれだった。いや、それ以上だった。頭ひとつ分以上、金盛よりも背が高い。

「はい」「島には按司が何人いる？」

「首長のイソバを入れて、主だった者は五名です。皆、イソバの兄弟です」

「村はどこにある？」

鬼虎が島の地図を取り出した。「ダデイグ村、ドウナンバラ村、ダンヌ村、テイバル村」地図上の×印を指差しながら鬼虎が言った。

「島中央のやや北寄りにサンアイ村」

「夜明け前に西進して村を襲う。集落はすべて焼き払え。抵抗するものは殺せ」

金盛ははなから交渉する気などなかったようだ。そして功をはやる金盛を撃^{せいちゆう}肘する者は

この場にはいない。

東の空が白み始める前に、金盛は軍を進めた。「鬼虎、案内せい」

長身の若者が黙って頷き、背を見せて駆け出した。あとから宮古島の兵が続く。

未明に沸き起こった喊声かんせいと悲鳴に眼を覚ましたダデイグ村の按司は、屋敷の窓から外を見た。屋敷の周囲は石垣に囲われている。石垣ごしに行き交う幾つもの頭が見えた。通用門で結ばれている隣の屋敷に武装した兵が火をかけていた。

「なにごとだ！」

按司の言葉に答える者はいなかった。按司はおっとり刀で屋敷から飛び出したが、部落内を縦横に走り回る正体不明の武装兵によってまたたくまに切り刻まれてしまった。

炎につつまれた部落の熱波が金盛の面を炙っている。金盛は哄笑こうしょうしていた。

「殺せ！ 武器を持って齒向かうものは皆殺

しにしろ」

抵抗らしい抵抗も受けずに宮古島の軍は思う存分暴れまくった。あつというまに一つの集落が灰燼かいじんに帰した。

「次だ！」鬼虎が先導し、侵略者たちはドウナンバラ村に襲いかかった。ここでも不意打ちをくらった与那国勢は算を乱して壊乱した。組織的な抵抗は皆無だった。ダデイグ村と同じように按司が引き出され、金盛の前で命を奪われた。

勢いを得た金盛は軍を三分した。二十名程の部隊を三つ編成し、二つの部隊にダンヌ村とテイバル村を襲わせることにした。部隊の頭役に鬼虎の用意した地図を見せ、目標を伝える。

「金盛様は？」

「サンアイ村を潰す。これで与那国は我々宮古のものになる。行け！」

三つの武装集団がそれぞれの襲撃地に向かった。

海に面して丘が張り出すように盛り上がっている。たいして高くもなさそうだが、海に向かう絶壁の上にあるせいか進軍する金盛たちを見下ろすように聳そびえたっていた。

「ヒンプンみたいだな」金盛はひとりごちた。それは、家の正面入口と門の間に目隠しのように設けられる琉球様式の石塀の名だ。魔除けという役割もあるが、通りからの目隠しとしても機能している。サンアイ村に向かう金盛にとって、それはあたかもヒンプンのように村を目隠ししているように感じられた。岩の背後が窺い知れないのが不気味だった。

「テインダハナタと呼ばれています」鬼虎がやや強ばった表情で土地での名を告げた。

「あの岩壁のむこうにサンアイ村があります」

焼きすてた集落の炎が明け始めた薄紫色の空を染めている。昨日までの荒天が嘘のように穏やかな朝が訪れようとしていた。ただし、

東の空を染めあげる朝焼けよりも禍々しい赤と橙、黄色を交えた炎と、炎にまとわりつき渦をまいてたちのぼる黒煙が、黒龍か紅龍のようにも見えた。

「あの炎と煙は目立ちすぎます」東方を見ながら、鬼虎が唇を舐め舐め、かすれた声で金盛に語りかける。まるで何かに脅えているかのような素振りだった。

金盛は後に続く兵に突撃を命じた。

兵たちが喊声をあげながら緩い勾配の坂道を駆け上がっていった。その動きが突然止まり、軍の先頭から怒号と悲鳴が聞こえた。

「うぬらはどこの者だ！」

荒々しい誰何すいかの声は朗々として、後方にいる金盛にもしつかりと聞き取ることができた。

「女か？」金盛が声の主を女と推断したとき、鬼虎が「やばい！」と叫んで、後方に向かつて駆け出した。

「鬼虎！」

引きとめようとしたが鬼虎の背は瞬く間に

小さくなり、ガジュマルの木とオオタニワタリの生い茂る葉の向こうに姿を消してしまっ
た。

仲宗根豊見親は王府軍の主将、大里王子の
もとにアカハチ征討戦役勝利の祝賀を伝えるに
訪れた。

「こたびの見事な采配、感服つかまつりまし
た」

仲宗根の言葉に大里は、丁重な礼をもって
こたえた。

「仲宗根豊見親の先導なくば、いかに大軍を
擁したとて、これほど短時日のうちに目的を
達することはできなかつたでしょう。尚真王
もさぞかし喜ばれ、豊見親の功績を嘉よみされる
ことと思います」

背後に控えている八名の將軍も、一樣に頷
き、仲宗根に好意の視線を向けていた。仲宗
根の背中を見ながら長田大主は宮古島頭職の
外交手腕を観察している。妹と幼馴染を犠牲

にして手に入れた勝利の果実は長田にとって
は苦いものだった。が、呑み下さなければなら
なかつた。でなければクイツバとアカハチの
死が無意味なものとなる。

首里王府、いや第二尚氏王朝第三代の王、
尚真はアカハチの乱を軽んじてはいなかつた。
征討軍三千という動員兵力がそれをものがた
っている。これは前王朝第二代の王、実質上、
三山統一の覇業を達成した尚巴志が当時、最
大の難敵であった北山王、今帰仁城なきじんぐすくに籠もる
攀安知はんあんちを討つのに投入した琉球戦史上、最大
の動員兵数と同じだったからだ。それも今回
は四百二十キロの雲烟うんえん万里ばんりの波濤はとうを越えての
作戦だ。三十二年前、前王朝最後の王、尚徳しょうとくが
喜界島を征服したときですら二千の兵を動員
したにすぎない。王府はその威信にかけて、
石垣島攻めを成功させなければならなかつた
のだ。敗戦は王朝の権力基盤を揺るがすこと
になる。それだけに今回の仲宗根の働きは大
きかつた。

「宮古島軍は我らの撤収後も、石垣島に滞在し、この地の治安を守っていただけだきたい」

「かしこまりました」大里王子の依頼に仲宗根は胸の前で手を合わせて頭を垂れた。左手で右手の拳を包む拱手きょうしゅの礼というものだ。大里王子は宮古島軍のほぼ半数が、この地を去って与那国島に向かったことを知らない。長田は仲宗根の危険な博打に不安を覚えていたが、もちろん面に出すことはなかった。

大里王子のもとを辞去した二人は女官群とすれ違った。赤い甲冑に身を包んで薙なぎ刀なたを携えている凜々しい女性が眼にとまった。おそらく彼女らの長であろう。

「豊見親様、あれは？」「久米島の神女、君南風きみはえだ」「神女ですか。あれで？」

「今回は神女群も戦闘に参加したのだ。筏に松明を乗せてアカハチの軍を陽動した作戦は君南風の提言によるものだ。それに王府軍の神女の使い方は、なかなか勉強になった」と言ってから仲宗根は先島の現状を話題にした。

「アカハチ派の按司、黒石こるせと嵩茶たけちや、加那かが死に、宮古派の仲間満慶山なかもつけいはアカハチに討たれた。石垣にいた六人の按司の中で生き残ったのはおまえ一人だ」

「確かに」指摘された長田はうかつにもその事実気づかずにいた自分を秘かに罵った。

「波照間島の明宇底獅子嘉殿みうすくししかどうんは宮古派だったが、アカハチ派のコレセとタケチャに殺された。波照間島は今、空位だ」

「西表の慶来慶田城用猪けらいけだぐすくようちよは健在です」アカハチに襲われて西表島に逃げこんだ長田を匿ったのが宮古派のケライケダだった。

「石垣に一人、西表に一人、ずいぶん数が減ってしまったな」言葉ほどには仲宗根の口調に悲嘆の色はなかった。むしろ嬉々とした軽さが感じられた。八重山の戦乱は仲宗根にとって自分に逆らう按司たちを排除し、自分の意のままに動く按司を再配置する絶好の機会だったのだ、と長田は気がついた。八重山で現在、仲宗根になびかぬのは与那国島のみ、

ここを嫡子金盛が調略すれば、金盛と次男の祭金まぢりがに、三男の知利真良ちりまららが先島における支配の中枢に座ることになるだろう。士族でもない母を持つ自分は彼らの下風に立つことは間違いない。だが、それでもいい。自分のオナリ神とも言える、クイツバの姉マイツバと、妹の供養を、おおっぴらにはできぬが陰ながらしてやろうと思っていた。

先頭集団から聞こえた悲鳴は自軍の兵のものであった。カタブールのような音が進軍経路の丘上から降り注ぎ、宮古兵の顔に、胸に、首に飛翔してきた矢が突き刺さった。「撃ち返せ！」しかし、反撃の矢は、坂下からなので威力がなかった。

「おまえたち、私の村に何をしたんだい！」
問いかけは弓箭兵きゅうせんへいによる斉射せいしやの後に発せられた。事実確認の必要を認めていなかったのだらう。東の空を焦す炎と黒煙を見れば、眼の前の武装集団が友好親善使節でないことは

誰の眼にもあきらかだつた。宮古兵の陣形が崩れた。坂道を三人が横に広がり、列をなして進行していたが、前三列がまさしく蹴散らされるように粉碎され、その中心に大陸渡来の青龍刀を振り回す女の姿があつた。女の巨軀は遠目にもわかつた。背後に与那国兵が続いている。女を取り囲もうとした宮古兵の動きを与那国兵の持つ槍が妨害する。女はまるで台風かじふちの暴風のように青龍刀を回転させ、宮古兵を切り崩していく。

金盛は進軍を止め、ずるずると後退しかけた兵をかきわけ、前線に躍り出た。青龍刀が颯ぐふう風のように金盛に襲いかかった。琉球詠えにした日本刀でそれを受ける。火花が散って、刃こぼれをした鉄片が顔にかかった。鼻の粘膜を刺激臭が突く。

「貴様は何ものだ！」女と金盛は同時に同じ言葉をそれぞれの国言葉で発した。

「仲屋金盛！」金盛の方が先に名乗った。「おやあ、宮古の空広そらびの倅かい？」女が仲宗根豊

見親のことを童名で呼んだ。青龍刀を右に左に持ち変えながら頭上で振り回しつつ、片方の口角を思いきりあげる。

「貴様の名は？」金盛の問いに女は恐ろしく低い声で答えた。

「イソバ」

なぜか金盛は総毛立った。彼^ひ我^がの身体能力差についての動物的な直感がそうさせたのだ。斬撃が左から襲ってきた。刀で防御できないと判断した金盛は背後に飛び退った。面前を青龍刀が通過した。頬がぱっくりと割れ、血玉がぷつぷつと浮かび上がる。怯んだ金盛にイソバが体当たりをかけ、宮古島の御曹司は仰向けになって地に倒れた。その両脇を与那国兵が駆け抜け、浮き足立った宮古兵に襲いかかった。兵たちは恐怖にかられて主将を置き捨てて海岸に向かって敗走を始めた。サンアイ・イソバの威風に完全に気を吞まれてしまったのだ。同時に主将があまり好かれていなかったせいもあるかもしれない。

「情けない兵たちだね」苦笑を浮かべたイソバは金盛の右足を左手で掴み、宙に浮かした。恐ろしい^{りよりよく}膂力だった。持ち上げられて金盛はイソバの背の高さに改めて驚愕した。鬼虎も大きかったが、イソバも負けず劣らず大きかった。大きいだけではない。女とも思えないほどの胸の厚みと両腕の筋肉の盛り上がりが見て取れた。天地が逆になった金盛の顔を自分の目の前に吊り下げ、イソバは再び不気味な笑いを顔に浮かべた。

「は、離せ！」イソバにとっては懇願にしか聞こえないであろう金盛の命令は聞き届けられた。金盛は投げ出され、再び、背中から地面に落ちた。肺の空気が一気に吐き出され、瞬間的に息が止まった。イソバは地面に投げ出された金盛を睨みつけた。

「宮古は石垣を制し、さらにこの与那国をも支配しようというのか」

「王府の命によるのだ」金盛が叫んだが嘘であつた。父、仲宗根豊見親の意思でここまで

やってきたのだ。この遠征は王府に許可を得てはいない。父は許可を得ることよりも、結果を謝罪し、許しを得るほうが楽だと思ったに違いない。ただし、流血沙汰を望んではいなかった。金盛はその命に背いたことを今では心底後悔していた。

「宮古は王府の番犬と成り果てたか」

「時代の趨勢すうせいなのだ。すでに琉球は明を中心とした大交易圏に参画し、その中枢となっている。もはや孤島に立てこもり、独り栄誉ある孤立を誇れる時代ではないのだ。与那国も琉球王朝に与くみし、繁栄の余光を浴びたらどうだ」

これは父の受け売りだった。

「繁栄の余光？」イソバが皮肉な笑みを浮かべた。

「独立の気概を失い、王府に媚びへつらい、あげく貢租を搾り取られることが繁栄の余光を浴びるといふことか？ 見返りは生存を許されるといふことだけだろうか」

「生き延びるといふことは何よりも大切なことだと思ふが」今の自分を省みての言葉には説得力があつた。だが、イソバには通じない。「見解の相違だな。私は与那国の独立を王府に認めさせる」

「アカハチと同じ道を歩むか」

「だまれ！　我らは宮古のように己が世界を放棄し、王府に取りこまれるつもりはない」

あおむけに転がっている金盛に向かつて青龍刀が振りかぶられた。それを振り下ろそうとした瞬間、与那国兵の叫びがその動きを止めた。「イソバ様！　西の村が！」兵が西の空を見やつて指差した。

炎と黒煙が島の西側からも立ちのぼっていた。ダンヌ村とテイバル村に向かつて宮古兵の攻撃を受けたのだ。

「兵を返せ！　戻せ！」イソバが叫び、宮古兵を追つていった与那国兵を呼び戻すためにイソバのまわりにいた兵が走つた。「うぬはあ！」イソバが地上に倒れている金盛を睨み

つけようとしたが、そこに宮古軍の主将の姿はなかった。一瞬の隙をついて逃走したのだ。「ふん！ 逃げ足の速さだけは誉めてやろうかい」青龍刀の柄頭を地面にどすん！ とついでイソバは戻ってきた兵をまとめて島の西に向かつて走った。

島の中央南部と西部に位置するダンヌ村とテイバル村で、イソバが憤怒の表情で振り回す青龍刀が宮古兵たちを殺戮さつりくした。斬り殺されなかった兵は、断崖から海に飛び込み、岩場で全身を粉碎する者、溺れ死ぬ者が続出した。

出立したときの半分以下にまで減った兵を引き連れ、金盛はほうほうの態で石垣島に帰ってきた。

「では、話し合いには応じず、一方的に攻撃をしかけてきたというのか」仲宗根豊見親は金盛に確認した。長田大主も話を聞いている。

「はい。狡猾なやり方でした。我々を交渉の

席に座らせている間に秘かに我が軍の駐屯地
を取り囲み、一斉に襲ってきたのです」一時
は不利な情勢に追い込まれたが、主将である
金盛が交渉の場を蹴って部隊に合流し、反撃
した。敵の部落四箇所を焼き落としたが、兵
の損耗そんもうが著しく、そこまで引き返さざるを
得なかったと仲宗根の嫡子は悔しそうに報告
した。長田は金盛の背後に控えている頭役の
表情が冴えないことに気がついた。苦虫を嚙
み潰したような顔をしている。

「わかった。ご苦労だった。私もことを急ぎ
すぎたかもしれん」

息子を下げさせた仲宗根は長田の顔を見て
苦笑を洩らした。

「不肖の息子を持つ親の苦衷くちゆうがわかるか」

無言のままの長田に「頭役の顔を見たか？
満面不満の塊だった」と言い、「だが頭役は
本当のことを話しはすまい。主将を讒訴ざんそした
と言われ窮地に追い込まれるからな」

「すべてはお見通しですか」

「いずれ、与那国から知らせがくる。そのために宮古から与那国の商人に人を買寄せたのだ」
それが仲宗根の眼であり、耳なのだろう。ちようど自分が波照間から石垣に呼び出されたときと同じ役割を与えられた者がいるのだ。だが、長田は鬼虎という名前までは知らなかった。

オヤケアカハチの乱平定を利用して与那国島を従わせようとした仲宗根豊見親の策は失敗に終わった。

だが、仲宗根は王府からあらためて宮古島頭職の地位を安堵あんどされ、次男の祭金は真刈まぢり金豊見親がにとうゆみやとして石垣島の頭職に任命された。長田大主は西表島古見こみの大首里大屋子おおしゅりおおやこに任じられた。王府が新設した官職である。上位の地頭職というところか。仲宗根豊見親の先島支配はまた一步、地歩を固めたことになる。

二十二年の歳月が流れた。仲宗根豊見親は六十六歳になっていた。

宮古島統一の覇者目黒盛豊見親の五世孫として生を受け、空広と呼ばれた幼い頃から神童の誉れ高く、数々の逸話を残し、十七歳にして大里大殿の家権を任され、十八歳のとき首里の尚円金丸のもとに赴き、宮古島頭職を任じられてから長い歳月を首里の後ろ盾を得ながら先島統一のために過してきた。

だが、与那国島はいまだに西海の一画で独立を保っている。

変化はあった。

サンアイ・イソバは消息をくらましていた。歿^{ぼつ}したのか、あるいは島を離れたのか。現在、鬼虎という先代の首長に匹敵する巨軀を持った武将が首長になっていた。与那国は、アカハチの乱の十年後に祖納^{そない}当^{とう}与人^{ゆんちゆ}を受け入れていた。祖納当与人は王府から任じられた監視官のようなものだが、実質上の統治者はイソ

バや鬼虎であった。与人は慶来慶田城用猪の息子だったが、島の支配権は得ていない。つまり、与那国島は名目上、首里王府の顔を立ってはいしたが、いまだに膝を屈していたわけではなかった。

嘉靖元年（西暦一五二二年）、王府は仲宗根豊見親に鬼虎の征伐を命じた。

「鬼虎は父上が使役していたのではなかったのですか」

攻撃拠点となった石垣島で、頭職である三男の知利真良豊見親が仲宗根のもとに顔を出していた。次男の祭金は暴政を咎められ任官四年にして交代させられている。

「なにかと役に立つ奴だったがな」

「サンアイ・イソバの消息が絶たれたのは、もしかしたら父上が鬼虎に……」

「奴は祖納当与人の慶来慶田城を脅すだけでなく、慶来慶田の命をも狙い始めたようだ」息子の問いには答えず、仲宗根は与那国島の現状を口にした。「王府に頭を垂れるふりさ

えしておればいいものを。どうやら大それた野望を持つにいたったようだ」

「飼いだに手を噛まれたのでござるか」自分の指示に従わぬ鬼虎は仲宗根にとってすでに便利な道具ではなく、危険な石火矢になっていた。いつ爆発しても不思議ではない。爆発すれば火の粉は飼い主に降りかかるだろう。

「王府は鬼虎の背後に私がいることをかぎつけたのかもしれない。今回はアカハチのときと違い、宮古島だけで鬼虎を成敗しろと言ってきた」

「王府への忠誠の証を見せろと？」「そういうことだ」「どれほどの軍勢で与那国島に渡りますか」

仲宗根がたった一隻の軍船でやってきたことが知利真良には疑問のようだった。後続の部隊がやってくるものと思っているのかもしれない。

「詐術を用いて鬼虎を討つ」仲宗根の脳裏に二十二年前の石垣島での戦いの映像が浮かん

でいる。参考にさせてもらうつもりだった。今回は少数精鋭で鬼虎征伐を決行する。彼が選んだ刺客は二十名だった。それに神女四名が同行する。二十名の武將は宮古島や周囲の来間島、下地島、伊良部島、池間島、多良間島の各地から集められた。波照間島や小浜島の按司もいた。中でも文武に秀でた存在として城邊ぐすくなぎの有力者、金志川かねしがわ兄弟がいた。兄は金盛、弟は那喜多津なきまたという。人生が終盤にさしかかった仲宗根は全先島の精鋭を集めて鬼虎を討ち、王府への忠誠の証を見せつけ、先島の支配権が誰にあるかを明らかにし、子孫にその座を譲るつもりだった。そのためには嫡子の金盛も同行させる。不肖の倅だが二十二年前の失態のけじめはつけさせねばならない。それに自分の後を継ぐのは金盛しかいないのだ。

宮古島から来たという女が四人、鬼虎の館を訪れていた。

「宮古島から？」

「鬼虎様にお問い合わせがあるとのことですよ」使い番は興味津々という顔で按司に訪問者の言葉を伝えた。その顔に浮かんだやや下卑た笑みは訪問者の美しさを告げているように思われた。「通せ」鬼虎も興味をそそられ、腰を軽く浮かせながら言った。

案内をうけた女たちは阿毘摩、恋種、伊安登之於母、大阿智と名乗った。いずれも美形ぞろいで、鬼虎は彼女等の容姿に思わず見とれ、警戒心は一気に最下限にまで下落してしまった。

「何用で、宮古から与那国に来たのだ」

四人が献上した諸味麴が鬼虎の前に出されていた。

「宮古は今、飢饉にあえいでおります。庶民はその日の糧にさえ不自由をしています」「まことか」「我らが宮古を代表してここまで参りましたのも、鬼虎様は宮古のご出身と聞き及び、その御厚情にすがりつくためでございます

ます。どうか宮古の窮状をお救い願えないで
しょうか」

四人の美女にかわるがわる泣訴され、さら
には身を寄せて、酌をされた鬼虎は女たちが
酒に何かを混ぜていることに気づかなかつた。
また、諸味麴が妙に舌先に苦味を残している
ことにも。

酒がまわり、部屋に嬌声があがりはじめた
頃、伊安登之於母が立ち上がった。「どうし
た？」座にいた誰かが声をかけた。「フール^厠へ」
艶然と微笑みながら、部屋を出た伊安登之
於母は屋敷の外に出て、待機していた男たち
に屋敷内の配置を伝えた。

「よし！ かかれ！」仲宗根豊見親の下知に
従い、刺客が屋敷内に突入した。伊安登之於
母から内部の人数、配置を聞いていた宮古勢
は鬼虎の側近を次々と葬った。倭人の崎原が
いらが四本の槍を四人の神女たちに手渡すと、
神女らも戦闘に参加した。

鬼虎の側近たちは手元に武器がなく、一方

的に殺された。神女たちが持ちこんだ毒入りの諸味麴や酒に混ぜた毒も与那国勢の戦闘力を減殺させていた。

「鬼虎！ 覚悟しろ！」

二十二年前に自分を先導した男に金盛が斬りかかったが軽くあしらわれてしまった。野生動物のような強靱な体力のせいか、信じられないことに鬼虎は、毒の周りが遅く正気を保ったまま刺客たちに対峙していた。室内の装飾から剥ぎ取った木の棒を手に行っている。さすがに多勢に無勢で反撃を諦めた与那国島の按司は部屋から転がり出て、石堀を越えて屋外に逃げ出した。途中、田んぼに転がり落ちた。足をとられながら抵抗をする。「空広の手のものか！」鬼虎の叫びに仲宗根豊見親が直々に応じた。

「おとなしく私の下知に従っておればよいものを。増長したなこわっぱ」

幼い頃、与那国へ渡ることを命じた宮古の頭役の老いた顔を鬼虎はまじまじと見つめた。

「空広！」

「己の過ちの代償は己の命で支払え」

仲宗根の言葉とともに神女の大阿智の槍が背後から鬼虎の体を貫いた。槍の柄を掴んで、大阿智を引き寄せようとした鬼虎を金志川那喜多津が袈裟懸けに斬りふせた。田中の泥に手をつき跪いた鬼虎の襟を掴んで引きずり出した金志川金盛が仲宗根豊見親の前に鬼虎を引きすえた。仲宗根は宝剣治金丸ちがねまるの鞘をはらい、鬼虎に留めをさした。仲屋金盛が鬼虎の首を落とし、高々とそれを掲げると、与那国勢の抵抗が止んだ。

鬼虎の死によって与那国島は王府に帰服した。仲宗根豊見親は宿願であった先島統一を成し遂げた。

首里城の一階、御差床うさすかと呼ばれる玉座の間で仲宗根豊見親は尚真王の前に拝跪はいきしている。

「仲宗根豊見親、久しぶりだな」

「四十八年ぶりでございます」六十六歳の仲

宗根はかしこまっつて答えた。

「十八歳の折、お父上、尚円王様にお目どおりいただいたとき、王は十歳でいらっしやいました」

仲宗根は、琉球王朝への自分の忠節の長さを訴えると同時に、第二尚氏王朝を建国した尚真の父、尚円の名を出すことにより、三代目の王、尚真への牽制も兼ねた巧妙な話柄わへいを口にした。

「そなたの王府への忠誠はよくわかってい

る」
「ありがたきお言葉。お父上の尚円様より、宮古頭職を任じられたのは臣が十八の時でした」あく強く、仲宗根は言葉を重ねた。

「先島を束ねる宮古の按司からの入貢の歴史は古い。永く入貢を絶やすことなく忠節を尽くす宮古に私はたいへん満足をしている」

「王府への朝貢を拒んでいた与那国島を征伐いたしました。今日はその報告にやってまいりました」

「八重山が完全に畏伏いふくすることになったのだな。王朝の威信はこれで磐石のものとなる」

「臣としてこれに勝る悦びはございませぬ。つきましては、王に与那国征討のお祝いとして、これなる宝剣を献上させていただきたく持参いたしました」玉座に武器など持ちこめぬゆえ、事前に渡してあった宝刀の名を臣下が読み上げた。「冶金丸というのか」「はい」

仲宗根豊見親は同時に御輿みこし・御玉みたまという玉称真珠も献上している。

「王府の宝として代々、伝えることにしよう」

尚真の言葉どおり、刀は王府の宝として代々受け継がれた。冶金丸は、他の二振りの名刀、千代金丸、北谷菜切とあわせて、国宝指定を受け、今も那覇市歴史博物館に所蔵されている。

仲宗根豊見親は先島の王たる地位を手に入れた四年後の嘉靖五年（西暦一五二六年）、七十歳の生涯を終えた。与那国を陥とした後

も自家繁栄のため手をつくした。鬼虎征伐に同行させた金志川兄弟の兄、金盛が衆望を集めており、これを潜在的脅威とみなして、与那国島からの帰路、多良間島で謀殺した。

仲宗根豊見親の死後、金志川の弟、那喜多津が宮古島の英雄、目黒盛の再来と呼ばれるようになり、それを恐れた仲宗根の跡を襲った嫡子、金盛によって謀殺される。だが、その策謀は王府の知るところとなり、「野原岳の変」として王府に糾弾された金盛は自害する。

金盛自害とともに王府から仲宗根家に与えられた宮古の独自職、豊見親の称号は廃止された。先島における王の地位を望んだ仲宗根の宿願はわずか二代で終焉を迎えた。しかし、王府は大首里大屋子という役職を新設し、仲宗根の子孫にそれを継がせる。空広の勲功を評価してのことだろう。

第二尚氏王朝は紆余曲折を経ながら、王朝としては一八七九年までの四百十年間、琉球

を統治することになる。王は累代十九人を数えた。第二尚氏王朝、第三代の王、尚真は、琉球王朝の中央集権体制を確立させた。琉球の版図は宮古・八重山から奄美にまで広がり、尚真は、歴代の王の中で最も著名な王となった。安定した権力基盤のもと、尚真の時代に現代まで受け継がれる琉球の各種文化が華開き、国家の基礎が築かれた。

尚真がこの世を去ったのは、仲宗根豊見親の死の翌年、嘉靖六年（西暦一五二七年）だった。六十三年の生涯だった。琉球王朝の最盛期を作り上げた二人の王、仲宗根豊見親と尚真の死をもって琉球史は新しい局面を迎える。

自主独立を求める島はいつの世も、自己を取り囲む海の向こうからやってくる征服者によって支配される宿命を負っている。サバニで往き来する時代までは海は島を優しく守ってくれた。しかし、文明は進歩する。技術が海を越えて島に変容をもたらす。琉球を薩摩

が襲撃するのは尚真王の死から八十二年後の万歴三十七年（西暦一六〇九年）。琉球処分により琉球藩が沖縄県になったのは明治十二年（西暦一八七九年）のことである。大和世やまとゆいからアメリカ世になったのは昭和二〇年（西暦一九四五年）。本土復帰は昭和四十七年（西暦一九七二年）であった。

そして南の海には今、中華人民共和国の船が頻繁に出入りをしている。

（了）